

太宰府の文化財

381

客館の水晶・メノウ 客館跡(特別史跡太宰府跡・朱雀三丁目)



西鉄二日市駅北側で見つかった古代の客館跡では、外国使節が滞在した大型建物や、日本・唐・新羅の高級食器が次々と見つかり話題となりました。唐ではじまったばかりの喫茶の茶器などもあり、大陸の先進文化がいち早くもたらされたことを、以前このコーナーでも紹介しています。

ここでは客館跡から出土した水晶・メノウ(瑪瑙)についてご紹介します。水晶・メノウは、いずれも石英(クォーツ)という鉱物です。透明なものも水晶といい、六角柱の美しい結晶で知られています。また、石英が層状に沈殿することで美しい縞模様が入ったものをメノウといいます。メノウは、古代には「馬腦」と書かれ、模様が馬の脳に似ていると考えられたようです。これらは玉(ぎよく)と分類されており、宝玉として加工されたものもありますが、それ以外の用途もありました。

写真は、上の石がメノウで、美しい白い縞模様が見えます。下の二つが水晶です。結晶化している透明の部分で六角柱の一部を観察されます。水晶は、大宰府政庁の中門・南門の地鎮具などに使われた例などありますが、市内の出土例はわずかです。

メノウの原石については、おそらく市内では出土例はないのではないのでしょうか。客館跡の基盤となる地層はこうした石を含まない粘土や砂なので、これらは外から持ち込まれたものでしょう。

古代の客館は、外国使節が持ち込んだ品々と日本の品物を交換する、すなわち交易の場でもありました。交易のため日本が準備したものには、絹の真綿などがありますが、ほかに火打石として水晶・メノウが海外に輸出されたことが知られています。つまりこれらは、火打石として、またそうした交易品として、取り扱われた可能性が考えられます。

このほか、現代の分類では水晶やメノウとは呼べない白い石英の塊も、客館跡からいくつも出土しています。このような石も火打石や交易品だったかはわかりませんが、客館跡という特別な場所から見つかったからこそ、歴史的な背景について思いがめぐります。

(海を渡った水晶・メノウについては、九州国立博物館4階・文化交流展示室の遣唐使船コーナーでも紹介されています。)

文化財課 井上信正

太宰府の文化財

382

戒壇院境内の石塔

— 中世律宗の影響をうけた五輪塔部材 —

十四世紀

観世音寺に隣接する戒壇院の境内の石塔について紹介します。戒壇院境内の南西に火輪、水輪が組み合わされた塔があり、これを便宜的に1号塔とします。もう1つは本堂の西側に、僧鑑真の供養塔とも開山塔とも伝わる五輪塔（仏教で使われる供養塔、墓石の一種で地・水・火・風・

空の五大要素を表すパーツで構成される）があり、これを2号塔とします。1号塔は花崗岩製で、表面は無文で彫刻や銘文はありません。火輪、水輪で構成されて、別の塔の相輪の破片が火輪の上に置かれています。塔の高さは83・7cmです。

2号塔は花崗岩製で色々な石塔の

パーツを組み合わせて作られています。使われた五輪塔の空風輪と火輪は古いものですが、地輪、水輪は別の新しいものです。塔の高さは157cmです。

1号塔の火輪、水輪、2号塔の空風輪、火輪を調べると、空風輪や火輪、水輪の形状やバランスが整っていること、復元した五輪塔の大きさが150〜180cm以上の大きくなること、無銘で種子（仏を表す文字）がないことなどの特徴があります。これらの特徴は中世律宗の本拠地である奈良県西大寺やその関連寺院で見られる石塔と多くの共通点があることから、戒壇院境内の2つの石塔は、中世律宗（西大寺流）の影響を受

けた五輪塔を使って造られたものといえます。

古代の戒壇院は、観世音寺に属し「天下の三戒壇」として著名であり、鑑真以来の戒律を伝える日本を代表する寺院の1つです。観世音寺は平安時代以降、天台宗の影響が強いついては文献資料も少ないため実態がよくわかっていません。この2つの石塔がどのような経緯をたどり戒壇院に存在しているのか詳しくはわかりませんが、大宰府の中世史を考えるうえで重要な意味を持つ石造物といえます。

文化財課 高橋 学



1号塔



2号塔

太宰府の文化財

383

弥生人の知恵・木材水漬け遺構

―国分千足町遺跡第4・8次調査

今回は、平成5年度と平成25年度に実施した国分三丁目での発掘調査で見つかった木材の水漬け遺構を紹介します。調査地は四王寺山から御笠川に向かって広がる沖積地に立地しており、遺構が形成される地盤は地下水位が高く、遺構を少し掘り下げると水が湧く状態でした。

調査では、今からおよそ2千年前の弥生時代中期の倉庫と見られる掘立柱建物と、土坑などが確認されました。写真①の土坑(第8次調査)では、直径約130cm、深さ約60cmの穴の中に加工途中の材木(写真②)や、丸太を縦に二分した木材(写真③)などが置かれていました。調査

中もちょうど木材が浸るくらいの高さまで水が溜まる状況で、この湧き出る地下水を利用して、木材を水漬けて保管していた土坑だと考えられます。写真④の土坑(第4次調査)では、同様の割材の他に、堅杵や作りかけの匙(さし)の破片(写真⑤)も出土しました。

り、当時の加工道具の主流であった石器でも、削りやすくなります。今回紹介した水漬け遺構には、伐採直後の粗加工の段階のものから製品に近い段階のものまでが含まれ、この場所で一連の木器製作が行われていた事を示します。調査地の北東では、同時期の円形の住居群が確認されており、この場所が集落における材木加工作業場だったと考えられます。調査によって弥生人たちの生活の知恵や当時の営みを垣間見る貴重な成果を得られました。

文化財課 遠藤 茜



写真①
材木の水漬け遺構



写真②
加工痕のある材木



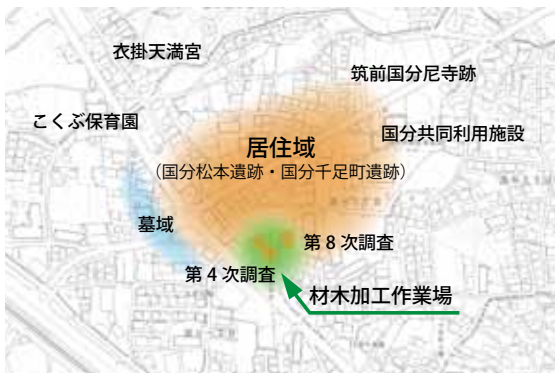
写真③
縦割りした木材



写真④ 第4次調査の水漬け遺構



写真⑤ 匙未製品



弥生時代中期の国分地区の集落域

今月の市民遺産情報

「隈廬公のお墓」(市民遺産第7号)春まつり開催

日時 4月15日(土)

午前10時過ぎ～(30分程度)

場所 隈廬墓前(朱雀三丁目、榎納骨堂敷地内)

太宰府の文化財

384

86年ぶりの木樋

水城跡第62次調査・特別史跡水城跡 (7世紀・水城・国分)

4月に特別史跡水城跡の東門跡に保存整備事業の一つとして「水城館」が開館しました。市では特別史跡水城跡の整備を行うため、平成26年度から東門跡周辺で発掘調査を行っています。今回、紹介する木樋も平成28年11月から実施した発掘調査により再確認しました。

水城は、約1350年前に築かれ、大宰府を防御した長さ約1・2km、幅約80mの土塁と濠で構成されています。濠は博多側の外濠と太宰府側の内濠が造られていました。この濠をつなぎ、内濠から外濠に水を送ったものが木樋です。

この木樋は、昭和6年に旧国道3号（現県道112号）の建設の際に移設した家屋の井戸工事により発見されました。当時の調査は、九

州帝国大学国史学科教授の長沼賢海氏の指揮のもと行われ、後に九州歴史資料館館長を務めた鏡山猛氏も学生として参加しています。この調査で木樋の取水口や吐水口も発見され、水城跡の構造説明に貴重な成果を残しました。

今回、86年ぶりに確認した木樋の一部は抜き取られていましたが、調査区の間端には蓋板、側板、底板を確認し、木樋が設置された当時に近い形で残っていました。確認した木樋は内法で幅約120cm、高さ64cm、各部材の厚みは蓋板8cm、側板19cm、底板29cmと、かなり大きな木材が使われた事がわかります。また、それぞれの部材の継ぎ目にはさまざまな加工が施されていることも分かりました。底板は2枚の板をつなぎ合

せるため、片方の底板の側面に凸加工、もう片方の側面に凹加工を施し、噛み合わせるようにつないでいます（図1）。このほか、つなぎ目に穴を開け、板を差し込み、底板のズレを防いだと考えられるホゾ穴加工も確認しました（写真1）。さらに、底板と側板にも凹凸の加工が施され、板同士を噛み合わせるようにつないだこともわかりました（図1）。

木技術の高さと併せ、建築技術の状況を物語る貴重な発見となりました。木樋は保存のため、埋め戻しましたが、水城館で紹介しています。4月に開館した水城館は、トイレや休憩スペースとともに水城跡の歴史を紹介する展示を行っています。水城館で水城跡の歴史に触れてみてはいかがでしょうか（施設の紹介は4頁をご覧ください）。

文化財課 沖田正大

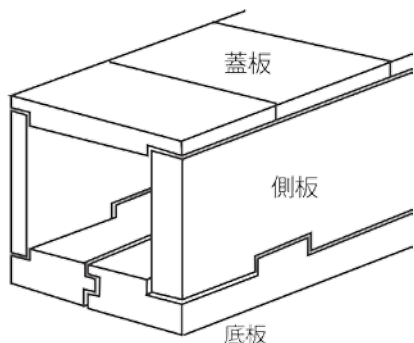


図1 木樋模式図



写真1 木樋全景（南東から）

太宰府の文化財

385

新指定された文化財

3月9日に行われました太宰府市文化財専門委員会の答申を受けて、4月10日付けで、次の2件が新たに太宰府市指定文化財に指定されました。

た。太宰府市指定文化財は、これで合計32件となります。

有形文化財（2件） ■ 菖蒲浦第1号墳出土品

所有者：市



方格規矩鏡



勾玉と白玉



鉄刀



鉄剣

菖蒲浦古墳群は、高雄二丁目の丘陵上に位置し、太宰府南小学校建設に伴って、昭和50年に調査されました。第1号墳は、5世紀の初めに築造されたと推測される径約15～16mの円墳で、主体部は7基確認され、墳丘中央に割竹形木棺が2基ありました。その割竹形木棺のひとつからは、方格規矩鏡1面、鉄剣1点、鉄刀1点、刀子3点、鉄斧1点、鋤先1点、鉈1点、針1点、勾玉1点、白玉180点などの豊富な副葬品が見つっています。その中でも方格

規矩鏡には鏡を包んでいた布が残っており、分析の結果、葛の繊維で織られた葛布と考えられ、現存する日本最古の葛布とも言われています。この古墳は、豊富な副葬品を有しており、この地域を治めていた首長と推測されます。割竹形木棺という畿内の墓制が用いられており、大和政権がこのような中小首長にまで支配を及ぼしていたことを物語る貴重な資料です。

銭弘俵八万四千塔方立

所有者：市

銭弘俵八万四千塔とは、中国五代十国のひとつであった呉越国（907～978年）の第五代銭弘俵が造立した小塔の法舍利塔の総称です。原遺跡（三条一丁目）から発見された方立は、銭弘俵八万四千塔の屋蓋の四隅にある突起部分で、高さ3.7cmの青銅製で、正面の2面に神将像、裏面には仏龕が表現され、その中に高さ2・1cmの仏坐像が造り出されています。銭弘俵八万四千塔は、10世紀後半に天台僧日延が呉越国から持ち帰った記録があり、これもそのひとつの可能性があります。銭弘俵八万四千塔は、完形品はもちろん

破片など合わせて全国で11例しか現存していない希少なものです。また、天台寺院として古代から中世にかけて隆盛した原山と大陸との結びつきや四王寺山周辺に展開した寺院の関係を考える上で貴重な資料です。

文化財課



正面



右側面



裏面

太宰府の文化財

386

落とし穴 江牟田遺跡第1次調査、梅ヶ丘二丁目

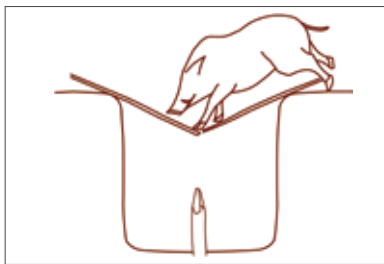
平成26(2014)年に宅地開発に伴い江牟田遺跡の発掘調査を行いました。この遺跡からは竪穴住居14棟、掘立柱建物4棟以上が見つかり、古墳時代後期(6世紀後半から7世紀代)の集落遺跡であったことがわかりました。また、この遺跡からは、古墳時代だけではなく、さらに古い時代の人々の生活の痕跡を確認しています。それが今回紹介する落とし穴です。



見つかった落とし穴1



見つかった落とし穴2



イメージ図



調査位置図

落とし穴はおもに縄文時代に多くみられ、古くは旧石器時代から作られており、北海道から九州まで広く確認されています。その構造は単純で動物を捉えるために、また逃げられないように地表に深く穴を掘ったものです。穴の形には円形や楕円形、方形があり、深く細く素掘りしただけのものや、落とし穴の底面に尖った杭を上に向けて設置して、穴に落ちた動物に傷を負わせるための仕掛

けを施したものがあります。江牟田遺跡で見つかった落とし穴は5基あり、いずれも平面は長方形でした。規模は大きいもので、長さ150cm、幅110cm、深さは80cm以上です。小さいものでは長さ90cm、幅70cm、深さは50cm以上です。底ま

えられます。少量ながら縄文土器片が出土していることから、落とし穴が作られた時代は縄文時代である可能性が考えられます。落とし穴はいずれも使われていた当時の地表から削られていたため上部の構造はわかりません。穴が開いたままの状態では動物に気づかれてしまうため、枯れ枝や落ち葉などで穴をふさいでいたものと考えられます。地域によっては効率よく動物を捉えるために、短い間隔で並べた落とし穴へ動物を追い込む方法がとられていたとみられるものもあります。今回の調査地で見つかった落とし穴については、丘陵の斜面に約15mから30m以上とまばらな間隔でありました。ただ、標高およそ48m前後の比較的緩やかな傾斜に作られており、動物がよく通る道に合わせて作っていたのかもしれませんが。縄文時代では、現在のように食べ物

物が溢れている時代とは異なり、食糧を得ることはとても大変なことで、落とし穴は当時の人々にとつて、動物を捕まえることができる狩猟方法の一つだったので。

文化財課 中村茂央

太宰府の文化財

387

猫は大宰府条坊で跳梁する

千支の中に入っていないませんが、猫は長らく日本人の生活の中で、人と共生してきた最も身近な動物のひとつです。

古代の猫について、五条でおこなった大宰府条坊第2・2・4次調査では、12世紀までに埋没した条坊の西側溝からイヌ、イノシシ、ニホン



大宰府条坊第2・2・4次調査出土のネコの骨



九州国立博物館大宰府政庁南門模型中に表現された猫
(九州国立博物館所蔵 撮影者 落合晴彦)

ジカ、ウシ、ウマの骨とともにネコ（イエネコ）の骨が出土しました。内訳は尺骨（左2右1）が3点、上腕骨（左1右1）、橈骨（左1右1）、脛骨（左2）、椎骨が2点ずつ、下顎骨、肩甲骨、踵骨（左）、基節骨（右）、肋骨（不明）、頭蓋骨が1点ずつ、そのほか、中足骨、第5中手

骨（左）、部位が特定できなかった中手骨（右）と中足骨（右）が1点ずつと、かなりの数のネコの骨が出土されています。骨には食用にされたと考えられるシカの骨に見られたような、解体された時に付く刃物の痕跡は観察できませんでした。

既知の全国の発掘調査ではネコ（イエネコ）の骨は弥生時代と鎌倉時代で出土例があります。弥生時代のもものは長崎県壱岐カラカミ遺跡Iから出土し、AMS年代測定（放射性炭素年代測定）をおこなったところ、2100〜2200年前のもので、出土遺物と併せて弥生時代のものであることが判明しました。しかし、この例は非常に稀少なもので、文献の世界では奈良時代の『古事記』や『日本書紀』などに猫の記述はなく、平安時代の『枕草子』や『源氏物語』などには見られ、ようやく平安時代には猫が広く存在したとされてきました。しかし、これまで古代の遺跡からネコの骨が出土した例はなく、太宰府で出土した骨を分析された奈良文化財研究所の故松井章先生は、考古資料として確認されたものとしてはおそらく唯一の古代の出土例となるだろうとされています。

このため少なくとも弥生時代以来、我が国に猫は存在していたようすが、国内では個体として少ない希少な動物であった可能性があります。

これまでに、大宰府条坊跡の井戸から出土した動物の骨の中に、縄文犬からシバイヌに連なる在来犬よりも大きなイヌの頭蓋骨が出土し、大宰府が大陸との盛んな交流拠点であったことから、このイヌは大陸から連れてこられた血統であった可能性が指摘されています（広報ださいふ平成27年11月1日号〈366号〉参照）。今回の例では残念ながら保存状態が良好でなかったため、同様の可能性を指摘できませんでしたが、国境のまちに異国の面持ちを持つ動物が跳梁していた姿が想像されます。真偽は別として、日本の猫は大陸から請来された貴重な経典をネズミの被害から守るため遣唐使が中国から持ち込んだ、という逸話はよく知られていますが、さしずめ古代の大宰府では観世音寺あたりで、帰朝した最澄さんや空海さんたちと一緒に猫が住みついていたのかも知れません。

文化財課 山村信榮

太宰府の文化財

388

竹の曲(県指定無形民俗文化財)

太宰府には、中世から伝わる伝統芸能、竹の曲があります。

竹の曲は、五条地区の「六座」とよばれた人びとが代々受け継ぎ奉仕

してきた伝統芸能で、現在も保存会を結成し活動しております。

舞は、平年9月22日、23日に行われる太宰府天満宮の神幸式で行われます。天満宮と榎社を



竹の曲

ます。天満宮と榎社を往復する神輿行列に供奉して「道楽」が奏され、還御後の23日夕方には、浮殿と天満宮本殿前庭で「さらの舞」、次いで「扇の舞」が奉納されます。

演じるのは、さらや扇を手にとって舞う稚児1人で、狩衣・烏帽子姿の成人男子5、6人が締太鼓・横笛・謡を行います。その舞は、中世の田楽に能楽などが混じりあつて現在の形になったとされ、中世の芸能を考え



六座の面
(太宰府天満宮 所蔵)

る上で貴重なものです。稚児を奉仕するのは毎年小学校高学年生で、神幸式が終わるとすぐに、次の年に舞う子が練習をはじめめるそうです。稚児は2〜3年で卒業するため、後継者で苦労しています。

さて、「座」とは商工業者などの同業者組合のことです。古代都市・大宰府条坊の東端にあたる五条地区は、中世から商工業が盛んとなり「六座」が設けられました。六座とは、米屋座、鋳物座、鍛冶屋座、染物座、小間物座、相物(魚)座の6つの座で、鋳物座の子孫・平井家につたわる文書には、源頼朝の時代、九州の諸商売頭を六座に仰せつけら

れた、と記し、市の繁盛のため宰府の町内にあつた祇園社に6月15日に能五番を奉納していたが、祇園社が観世音寺境内に移つてからは天満宮に奉納するようになった、と伝えてあります(なお、船越家に伝わる文書には、祇園社と天満宮の両社に奉納した、とあります)。

このような中世からの伝統を示すように、古い締太鼓と面が六座の子孫に伝えられています。締太鼓には文禄元(1592)年に修復したことが記されています。面は女面二面、坊主面一面、翁面一面、熊坂面一面があり、いずれも南北朝から室町時代のものです。能面が様式化される以前の古風を伝えていると言われています(太宰府市指定文化財)。このうち翁面に記される「赤子大夫」は、『観応三(1352)年周防国仁平寺本堂供養日記』中にみえる猿楽者・赤子大夫と同一人物と考えられています。

太宰府を代表する古典芸能として、昭和35年に県指定無形民俗文化財に指定され、神幸式以外でも、秋思祭などの天満宮行事や、市の公式行事で演じられています。

文化財課 井上信正

太宰府の文化財

389

水城を支える樹木―アワブキ―

特別史跡水城跡は、築造から1350年以上経過しても現在までその姿を保っています。これは築造時に崩壊を防ぐさまざまな技術が使われていたことがその要因の1つと考えられています。その技術の1つに土

塁の基礎を安定させる「敷粗朶」があります。これは土塁の一番底の基礎になる基底部に植物の粗朶（枝葉）を敷くことで、軟弱な地盤を安定させその上に積み上げた土が地震などで横滑りをしないようにするもので、

元は中国から朝鮮半島を経てもたらされた技法でした。敷粗朶に使われた枝葉のうち腐らずにそのまま出土していたものがあり、その資料を分析することでどのような種類の樹木が使われていたかがわかりました。

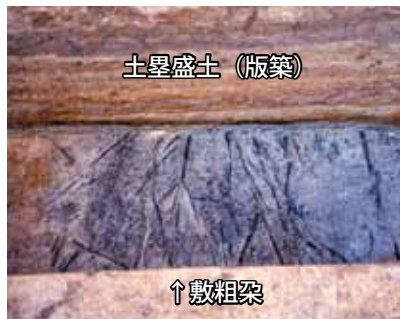
この敷粗朶に使われた樹木の1つであるアワブキを、最近整備を行った、東門エリアの「水城館」、中央エリアの「水城土塁断面ひろば」において、水城を知る1つの教材として、それぞれの場所に植えています。アワブキは、アワブキ科アワブキ属の樹木で、本州、四国、九州の山



水城館のアワブキ



アワブキの葉



土塁基底部の敷粗朶 (画像：九州歴史資料館提供)

地や沢沿いに自生し、高さ8～10mになる落葉高木です。アワブキの名前の由来は、この材の枝を燃やすと切り口から泡を吹くことから名前が付けられたとも、白い花を付けたときに木全体に白い花が泡のように咲き乱れるからとも言われています。葉は、長さ9～25cmの長楕円形で先は急に尖り、茎の1つの節に1枚ずつ方向をたがえてつきまします。縁には浅い鋸のような棘があります。花は、6～7月に枝先に長さ15～25cmのたくさんの軸を持った花を付け、淡黄白色で直径4mmの小花を多数咲かせます。花弁は5個。花からは甘い香りが匂います。実は、直径4～5mmの核果で、秋(9～11月)に、赤く熟します。幹を見ると樹皮は紫暗灰色で滑らかですが、褐色の小さなぶつぶつとした穴(皮目)が目立ちます。

巨大な水城の土塁を底辺から1350年以上も支えてきた敷粗朶を直接見ることはなかなかできませんが、上記2カ所の整備地にアワブキを植えていますので、敷粗朶に使われたアワブキがどのような樹木だったのか、ぜひ現地でご覧ください。

文化財課 高橋 学

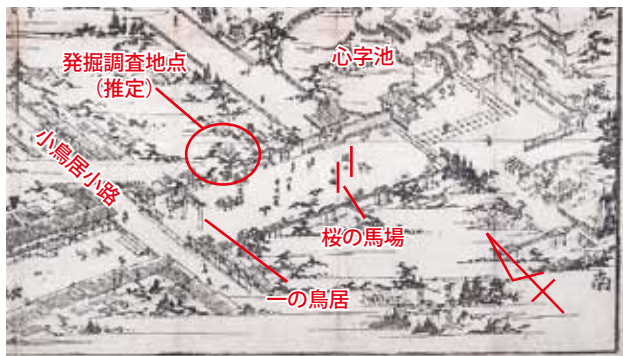
太宰府の文化財

390

太宰府天満宮参道・桜馬場の北側側溝 (宰府三丁目、江戸時代後半)

天満宮参道の小鳥居小路と交わる
ところから東側は、「桜馬場」と呼
ばれていました。江戸時代の絵図を
見ると、南北両側は社家が広がり、
道沿いに桜の木が並ぶ広い空間が描
かれています。

参道に面した馬場遺跡の発掘調査



文政二（1819）年の「太宰府天満宮御境内之絵図」
に描かれた桜馬場参道
(九州歴史資料館蔵、『福岡の神仏の世界』から転載、注記)



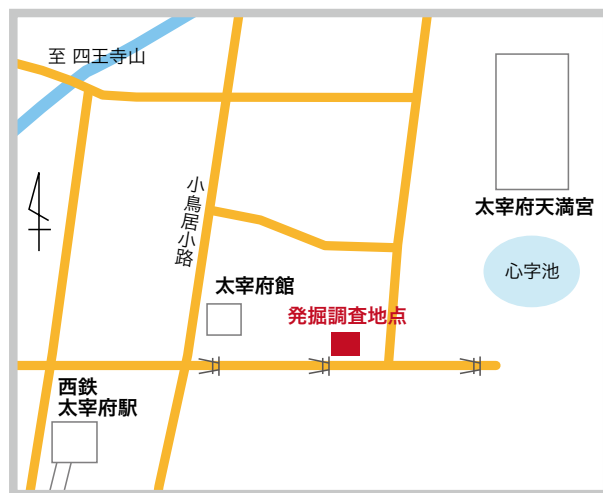
調査で現れた江戸時代の石積み溝
(北西から・写真の右手が参道側)



上空から撮影した現代の参道と石積み溝
(写真の天が東)

で、参道に沿って東西方向に延びる
溝が確認されました。調査地は、参
道の二つ目の鳥居（二の鳥居。明
治45年、伊藤伝右衛門建立）を過ぎ
て20mほど進んだ左手（北側）、現
在はコーヒー店が建っている場所
です。

写真の石積み溝は、幅
は約65cm、深さは80cmほど
で、現在の参道の歩道の北
端から石積み溝の南岸まで
は約3・8mありました。
溝の石積み造られたのは、
18世紀後半以降と考えられ、
当時の参道がこの地点では
現在よりも北に3・8mほ
ど広がったことが分かりま
す。溝を埋めていた土の上
層は近代とみられる茶わん
などが出土し、そのころに
は溝は使われなくなってい
たようです。これまで古い絵図で示さ
れてきた桜馬場の参道の広さが、今よ



位置図

りも広がったことを実際の遺構が物
語ってくれました。

その後、明治政府から出された神
仏分離令とともにそれまで天満宮に
奉仕してきた社家の一部を残して商
業に転職したり転出したりするなど
して、桜馬場参道の景観は、斎垣や
塀で区切られた社家町から、町家
が並ぶ現在の姿に変化していきまし
た。

ぜひ、参道を歩く際には、かつて
の参道の姿を思い浮かべてみてくだ
さい。

文化財課 遠藤 茜